

歴史を語る建物たち

秋田編
(第12回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

北鹿ハリストス正教会曲田福音聖堂(大館市)



大館の市街地から国道103号線を南東に数キロ走った曲田集落の中に、ポツンとかわいらしい木造の建物^{ほくろく}が立っている。ロシア正教の流れをくむ、北鹿ハリストス正教会曲田福音聖堂で、明治25年に建てられたこの建物は、現存する木造ビザンチン様式の聖堂としては日本最古のものである。現在は秋田県の指定有形文化財となっている。

地元の豪農が建設

日本にロシア正教が伝えられたのは、幕末の安政5(1858)年、ロシアの初代領事ゴシケビッチが函館に赴任した時にさかのぼる。文久元(1861)年にニコライが函館に赴任すると、日本での本格的な伝道が始まった。函館でニコライに日本語や日本文化を教えたのが、大館出身の医師・木村謙斎であった。

明治10年頃から、秋田県北部にも函館から伝道師が派遣され、ロシア正教の布教が始まった。そこで、郷里の大館に戻っていた木村は、曲田集落の豪農・畠山市之助に聖堂建設を相談した。元々仏教徒であった畠山だったが、正教の教えに賛同し、また明治24年の東京復活大聖堂(通称:ニコライ堂。国指定重要文化財)

の竣工時に上京してその威容に感銘を受けたことから、土地を提供し、そこにニコライ堂を模した秋田杉の聖堂を建設した。なお、建設にあたっては、ニコライ堂建設に携わった大工も1名参加した。また、日本初の

昭和三十三年の聖堂内部。内装やイコンの配置などは、現在もほとんど変わっていない。



女性洋画家である山下りんは、聖堂にイコン(聖像画)19点を寄贈した。

布教当初、地元の反応は冷やかであったが、名士でもある畠山が洗礼を受け、聖堂も建てたことから、「畠山さんなら…」と集落住民も次々と信者になり、礼拝も盛んに行われた。

しかし、昭和初期になると畠山家は没落する。そこで、借金のかたに聖堂を取られてはかなわないと、畠山家は宗教法人を立ち上げ、そこに土地と聖堂を移管した。現在は補祭の釜谷幹雄さんが、宗教法人の代表を務めている。

増田明美さんも2度ビックリ

釜谷さんは、母親が畠山家の子孫であったことから、幼少のころに洗礼を受けていた。もっとも、「どこか正教の“なよっとした”雰囲気になじめず、子どものころは聖堂が嫌いでした」と当時を振り返る。

大学進学で上京した後、しばらく東京で幼稚園の先生を務めていたが、帰郷した際に、「本当はパワフルだった(釜谷さん談)」聖堂内の装飾に魅了され、以来30年余りにわたって聖堂を預かっている。

聖堂に魅了されたのは釜谷さんだけではない。番組の取材で訪れた元マラソンランナーの増田明美さん(現・スポーツライター、大阪芸術大学教授など)も、最初は聖堂が想像以上に小さかったことにビックリし、さらに聖堂内部のすばらしさにビックリしたという。案内役を務めた釜谷さんは、「(増田さんは)取材でとても感銘を受けていました」と語る。

また、日本を代表する映画俳優である三国連太郎も、映画『八甲田山』(昭和52年公開)のロケの合間に興味あって聖堂を訪れている。当時三国を案内したのは、畠山家の子孫の1人であった。

他にも、吉永小百合さんの番組で紹介されたり、NHK番組「日曜美術館」で放映されたりと、メディアの露出度は意外と(と言っては失礼だが)高い。

鳴りやまめ補祭の携帯電話

聖堂は、礼拝やイベント以外は普段施錠されているので、見学するには釜谷さんの携帯電話に連絡して開けてもらう必要がある。

特に、秋の行楽シーズンには200人以上の見学客が訪れることもあり、「(見学申し込みで)携帯電話が鳴りっぱなしのこともあります」と釜谷さんは笑う。そして、「聖堂を見学した人の中には、感激して“まるで宝石箱のようですね”とおっしゃってくださる方もいます」とうれしそうに語る。

一方で、連絡が必要なことを知らない観光客から、「せっかくタクシーを走らせて来たのに、鍵がかかって中を見られなかった」と市の観光協会に苦情が寄せられるケースもあり、釜谷さんは、「実は、この聖堂は、観光地として評判が良くも悪くもあるのです」と苦笑する。釜谷さんの連絡先は聖堂のホーム

ページやパンフレットなどに記載されているので、確認してから見学されることをお勧めする。

多くの人の支えでこれからも維持

聖堂の脇に設置された鐘は、数年前に大阪の聖堂からいただいたものだ。「聖堂に必要な鐘がなかったので、ずっと困っていました。これは、信者が発注したものの、出来栄が気に入らなくて使われずに倉庫に眠っていたものを、知人を介して譲り受けたものです」と釜谷さん。ところが、専門家に調べてもらったところ、実は1,000万円以上する代物であることが分かり、釜谷さんも、「そんな高価なものがタダで手に入ったなんて…」と驚嘆したようだ。

また、木造建築物の大敵である白アリの駆除は、自由の女神(米ニューヨーク)などと同じ商品システムを導入している。本来は非常に高価なものだが、釜谷さんは、「商品を扱っている秋田市の業者さんが、『曲田福音聖堂に導入すれば当社の宣伝になる』と、格安で導入してくれました」と話す。

さて、築120年以上を経た聖堂は老朽化が激しく修繕が必要なのだが、宗教法人には十分な資金がない。その窮状を知った大館出身の内田青蔵・神奈川大学教授(近代建築史)が13人の仲間を集めて「曲田福音聖堂を守る会」を立ち上げ、費用集めに全国を奔走している。内田教授も少年時代、何度も聖堂を訪れたようで、寄付を募る依頼文書からは、内田教授の聖堂に対する思いが伝わってくる。

「内田教授らの働きかけのおかげで、1~2年後にはおおよそ資金のめどが立ち、修繕できそうです」と釜谷さんの喜ぶ姿が印象的であった。

昭和初期、借金のかたを逃れるために宗教法人を立ち上げたことから、今日まで多くの人たちに支えられてきた聖堂。釜谷さんも、「聖堂は自分を育ててくれた大事な存在。これからも守っていきたい」と意気込む。

小さな集落到ひっそりとたたずむ小さな聖堂は、いつまでも輝き続けるに違いない。

(東北公益文科大学特任講師・山口泰史)



現在の聖堂内部。保護のため本来は撮影禁止だが、本取材のために、特別に許可していただいた。(筆者撮影)